対照研究と韓国における日本語教育

森　山　新*

<목　차>

1. 対照研究と外国語教育
1.1 構造言語学と対照研究
1.2 Chomskyの生成文法の出現と対照研究
1.3 生成文法出現後の対照研究
1.4 有標性と対照研究
1.5 対照研究と外国語教育
2. 日本語教育と日韓両語の対照研究の現況
2.1 調査の方法
2.2 対照研究による日本語教育論文一覧
3.3 まとめ

1. 対照研究と外国語教育

対照研究とは一般に「言語の対照研究」を意味し、「対照言語学(constractive linguistics)」などと呼ばれてきたものである。「対照言語学」は「比較言語学(comparative linguistics)」とは異なり、そもそも外国語教育を目的として発達してきた。対照言語学の歴史は比較的新しく、第二次世界大戦後のアメリカに始まった。当時世界的に盛んになった「外国語としての英語教育」に貢献しようとする実践的・教育的な動機から始まったのである。一方、こうした実践的・教育的な動機からではなく、あくまでもアカデミックな立場からの対照言語学は、後になって始まったものである。これは、他の言語との比較の中で、ある言語の特色がよりいっそう明らかになるという考えに基づいて発達した。

日本における対照研究の始まりは1970年代半ばにまでさかのぼる。それまで日本語は外国人が学ぶ第2言語としての認識はほとんどなく、もっぱら日本人が学ぶ言語、いわゆる国語でしかなかった。ところが70年代半ば、日本の高度経済成長を背景に、日本語を学ぶ外国人が増え始め、外国人への日本語教育が初めて取りざたされるようになり、「外国語としての日本語」という観点の必要性や他の諸言語との対照研究の必要性が認められるようになったのである。またそれまでは国語として自明のこととしていた個々の言語事象を他言語との比較対照の中で一つ一つ明確に記述しようという「日本語学」としての学問的視点が、対照研究という方法論を用いるようになっていった。

このように対照言語学は、そもそもが外国語教育を目的としたものであるため、対照研究と外国語教育とは密接な関係があるのは当然なことである。ところが、このように密接な関係を持っている対照研究と外国語教育ではあるが、歴史的にその関係は大きく移り変わって

* 世宗大學校日語日文學科　日本語教育

きた。特に1950年代後半にチョムスキー(Chomsky)が提示した生成文法は、当時全盛を誇っていたアメリカの構造言語学に大きな疑問を投げかけたため、構造言語学と共に全盛期にあった対照研究にも致命的な打撃を与えた。そればかりでなく、1970年代以降には、生成文法が対照研究に対し、それまでとは全く異なった新たな方向性を提示したという点でも対照研究と生成文法との関わりは重要である。したがって　英語及び英語教育を中心とした対照研究の歴史は、大きく3つに分けることができる。

(1) Chomskyの生成文法出現以前の構造言語学と対照研究の全盛時代(1960年以前)
(2) Chomskyの生成文法の出現と構造言語学及び対照研究の挫折時代(1960年代)
(3) Chomskyの生成文法が対照研究に新たな視点を提示した時代(1970年以降)

1.1 構造言語学と対照研究

戦後アメリカの強大化の中で、外国語としての英語教育は世界的な発展を成す。すなわちよりよき外国語教育のためには、目標言語と共に、学習者の母語に対しても体系的で詳細な記述が必要であり、両者の比較・対照が重要な意味を持ってくる。当時は目標言語と母語とを比較し、その違いが大きければ大きいほど学習が困難となると考えられ、対照研究(対照分析) は学習者の学習上の困難点を予測すると考えられ、大きな注目を浴びた。

代表的なものとしては、フリーズ(C. Fries 1945)やラドー(R. Lado 1957)などがある。ブロック(B. Block)は、精力的に日本語研究に取り組み、その弟子と共に古典的な日本語教科書"Spoken Japanese"を書いている。またクライニヤンズ(E. Kleinjians 1958)は、日本語と英語を対照研究し、日本人の英語学習者の困難点を予測し、日本における英語教育に役立てようとした。

1.2 Chomskyの生成文法の出現と対照研究

ところが、対照分析が予言する学習上の困難点は必ずしも実際の誤用としては現れなかった[1]。またたとえ現れたとしても、それらは既に現場の教師たちにとっては経験的に周知の事実であり、わざわざ対照分析の成果を待つ必要もなかった。したがって　構造言語学に基づいた対照分析は次第に人気を失いだした。

さらにそれに追い打ちをかけたのが、チョムスキー(Chomsky)の生成文法の出現である。チョムスキーは自らの生成文法をもって、対照分析の理論的基盤であった構造言語学を鋭く批判した。このように当初学習者の困難点の予測とその対応策に期待を寄せて発達した対照分析は、実践的、理論的の両面から批判を浴び、急速に衰退を見せる。その結果対照分析は急

1) しかし当時の対照分析のすべてにおいて、単なる異同がそのまま学習上の難易度に反映されると考えていたのではない。例えばStockwell et al.(1965)は、学習上の難易度は単に目標言語と母語との異同の大小ではなく、困難性のタイプの違いによるという、より洗練された分析を行った。困難性のタイプを分離型(X→X・Y)、新規型(φ→X)、欠落型(X→φ)、融合型(X・Y→X)、一致型(X→X)の5種類に分類し、難易度の階層性を示した。このうち、分離型が最も学習が難しく、新規型、欠落型、融合型と順次習得が容易になり、一致型が最も学習が易しいとした。

速に人気を失い、また研究の視点も「如何に教えるか」といった教授側からの視点から「如何に学ぶか」という学習者側の視点へと方向転換し、学習者の誤用が対照分析の予想通りでないとすると、実際に間違うのはどのようなところなのかを追跡し、集積する「誤用分析」へと移っていく。

1.3 生成文法出現後の対照研究

構造言語学は音素論や形態論ではそれなりの理論と方法論を持ち、発展を見せたが、文単位の構文論や意味論の分野では充分ではなかった。これに対し50年代後半に出現した生成文法は、あらゆる分野を統合した体系的かつ普遍的な言語理論の構築を標榜すると共に、あらゆる言語を等しく扱えるような普遍的な言語理論の構築を模索した。その結果、生成文法は直接には外国語教育のための対照研究を意図していなかったが、その性格からして、諸言語の対照研究をしていく上で、有効な視点を提示することになる。井上(1978)は生成文法による日本語と英語の初めての包括的な対照研究を行っている。

さらに生成文法はChomsky(1981)において、ＧＢ理論(Government and Binding Theory：統率・束縛理論)と呼ばれる新しい段階に入り、普遍文法(Universal Grammar)に近づいていく。そして言語には個別性を越え、全ての言語に共通した普遍的側面があり(普遍文法)　、言語の個別の特殊性はパラメータ(parameter)により説明する。つまり人間は生得的に全ての言語に共通した言語知識(普遍文法)　を持っており、生後ある個別言語に触れる中で、その言語に必要な普遍文法の活性化の範囲やパラメータの値が設定され、個別言語の文法が形成されると考える。つまり諸言語の違いとは、普遍文法の使用域(活性化の範囲)　とパラメータ値の違いで説明されるのである。

普遍文法の使用域とは、例えば語順を例に言うと、言語には日本語など、語順がかなり自由な言語と、英語など語順にあまり自由でない言語とがある。英語のように語順が厳密な言語には移動規則が見出されるが、日本語のように語順が自由な言語には移動規則があまり見出されない。普遍文法ではこの違いを活性化の有無で説明する。すなわち移動に関する普遍的原理はもともと全ての言語話者の頭の中に生得的に備わっているが、英語などの語順が厳密な言語に接した場合には活性化され、日本語など語順に厳密でない言語に接した場合には活性化されないと考えるのである。

またパラメータ値の違いに関する例を挙げれば、英語のようなＳＶＯ型の言語は主要部が補部より前に位置し(主要部先端型)　、日本語のようなＳＯＶ型の言語は主要部が補部より後ろに位置する(主要部末端型)　。このように主要部の位置は先端型か末端型かの2つの値を持つパラメータとして記述できるのである。言語獲得の過程とは、与えられた言語入力から、パラメータの値を固定化することであると言える。英語母語話者は与えられる英語の入力に基づき、主要部位置のパラメータを先端型に定め、日本語母語話者は日本語の入力をもとに、主要部位置のパラメータを末端型に定めるのである。また言語には日本語のように空主語を許容する言語と、空主語を許容しない言語とがある。空主語のパラメータでは、英語話者は

英語入力をもとに、空主語を認めないというパラメータを選択し、日本語話者は日本語入力をもとに、空主語を認めるというパラメータを選択する。このように普遍文法の使用域を決定とパラメータ値の固定化をもって個別言語の個別文法が習得されると考えるのである。

このように普遍文法では、普遍文法へのアプローチから全ての言語の普遍性を求めると同時に、パラメータへのアプローチから個別言語の特殊性を追求するため、諸言語の普遍性と個別性への研究とが共に必要となる。その結果普遍文法は諸言語間の類似点と相違点を明らかにする対照研究を必要とするようになったのである。福井(1989)はこの立場から日英語の対照研究を行っている。

普遍文法の考え方によれば、言語の習得しなければならないものはパラメータの設定値であり、普遍文法自体は全ての人間が生得的に備えているため、習得する必要がない。L2を習得するということは全く新しい文法規則をゼロから習得するというよりは、L2言語のパラメータ値を如何に設定するかを新しいL2の入力データから発見することである。その際に、L1のパラメータ値がL2に転移するのか、それともL1のパラメータ値は何ら影響を及ぼさず、L2習得は母語習得と全く同じようなプロセスで行われるのかが問題となる。例えば空主語を許さないフランス語話者と空主語を許すスペイン語話者がL2として英語を学ぶ場合を例に考えてみれば、もし前者が正しいなら、それぞれのL1のパラメータ値が転移し、英語習得にあたって、フランス語話者は空主語を許さず、スペイン語話者は空主語を許すといった傾向が見られるであろう。またもし後者が正しいとすれば、L2としての英語習得はL1としての英語習得の過程と同じように、フランス語話者もスペイン語話者も空主語文から習得を始めることになり、両者に差は見られないであろう。

このようにL2習得にあたって、L1のパラメータ値がどのように再設定されるのかやL1のパラメータ値がL2に転移されるのか、L1とL2のパラメータ値の違いがどのように習得順序に影響を及ぼすのかなどに関し、様々な実験・研究が行われてきた。しかしそれらの実験結果は、転移の発生や習得順序の問題をL2とL1の間のパラメータ値の違いで説明できるものもあれば、説明できないものもあり、いまだ確かなことを言える段階には至っていない。

1.4 有標性と対照研究

アメリカ構造言語学に基づく古典的な対照研究の限界を補足する理論として、パラメータの概念と共にあげることができるのが、有標性(markedness)という概念である。有標性とはそもそも、世界の諸言語の言語学的一般性を明らかにしていくための用語で、言語的一般性のあるものは無標(unmarked)であり、例外となるものを有標(marked)であるとした。また有標性の概念はL1やL2の習得研究においても用いられるようになり、言語の有標の属性は無標の属性に比べ、習得が難しく、出現も遅れるとされた。

有標性の概念には生成文法に基づく有標性と共に、生成文法に基づかない有標性がある。生成文法に基づく有標性の概念とは、普遍文法として生得的に固定化した原理と、入力データにより生後固定化していくパラメータで構成される中核文法(core grammar)が無標(unmarked)であ

り、普遍文法の原理やパラメータ値を直接には反映しない言語特有の言語的属性が有標(marked)であると考える。無標の中核文法はパラメータ値を決定するための最低限のデータに触れるだけで獲得できるので習得が容易であり、有標の周辺文法は一つ一つ学習しなければならないので習得が難しいとされる。またパラメータにも有標値と無標値が存在し、初期には無標値に設定されているが、これを有標値へ再設定するには肯定証拠に接する必要がある。その結果、パラメータの設定は先に無標値が設定され、有標値は後に再設定されることになる。

これに対し生成文法に基づかない有標性の概念は、例えば意味についてはKellerman(1979)、音韻についてはEckman(1977)、統語的現象ではGass(1979)やHyltenstam(1984)などがあり、生成文法が定義するものとは異なる有標性の概念をもってL2習得を説明している。

生成文法に基づくか否かにかかわらず、有標性に関する諸概念は、L2習得において無標の構造が特別な地位を持つという点では一致しているが、実際に言語の有標の属性のほうが無標の属性よりも習得しにくいのか、母語の転移の有無が有標性と関係するのか、などについては、相反する実験結果が出ており、未だ確定的なことを言える段階には未だ至ってはいない。

1.5 対照研究と外国語教育

このように構造言語学に基づいた対照研究はChomskyの生成文法との論争などをきっかけに、母語と目標言語との構造上の違いの中には、実際に学習上の困難(誤用) として現れるものと、母語と目標言語との構造上の違いにもかかわらず学習上の困難(誤用) としては現れないものがあることを我々に教える結果となった。そしてその原因を説明するために、生成文法のパラメータの概念や様々な有標性の理論などが出現した。しかし以上述べてきたように、これらパラメータや有標性の概念は、習得の難易度や母語転移のしやすさなどを完全に説明しきれてはいない状況にある。

しかしながら、対照研究により学習上の困難点や母語の転移について、未だに記述できていないことは事実であるが、実際に生じた学習上の困難点がなぜ生じたかを説明することは可能であり、その意味では、対照研究は外国語教育において明らかに大きな役割を担ってきた。対照研究が外国語教育上の困難点を予測しうるのかどうかという点は未だ疑問として残されているが、パラメータの理論にせよ、有標性の概念にせよ、それが実際にできるかどうかは今後のさらなる研究の成果を待たなければならないようである。

2. 日本語教育と日韓両語の対照研究の現況

2.1 調査の方法

以上見てきたように、対照研究はそもそも外国語教育を目的として生まれ、発展してきたものである。したがって、ある意味では対照研究の多く(またはすべて) が外国語教育を目的としたものであるとも言えなくはない。対照研究と外国語教育との関係は臨床医学と治療と

の関係にも例えることができるであろう。日韓両語の対照研究もまた、同じような意味でいかにそれが純粋に学問的な動機から行われた研究であったとしても、それを外国語としての日本語教育、または韓国語教育のためのものであるとも言えなくはない。そのためこれまでの対照研究が教育を目的としたものであるのか、それとも純粋に学問的な動機から行われたものであるかを見分けることは、非常に困難と言わざるを得ない。また純粋に学問的な動機から行われた対照研究であっても、それを外国語教育に用いることも充分に可能であり、それをするかどうかは、研究をする側以上に、その成果を用いる側に委ねられている。

本稿は日韓両語の対照研究の中で、(学問的な動機から行われたものではなく) 日本語教育を目的としたものが、これまでどのくらいあるかを数的に明らかにすることを目的としているが、以上のような理由からそれは容易ではなかった。実際それを行うには、論文の一つ一つに目を通してみる必要があろう。本稿では時間的な都合から研究の題名のみをもってそれを判断することになったが、実際それを判断することは容易なことではなかった。したがって本稿では、研究論文の題名に教育的目的が明示されたものの現況を主として取り扱ったことを予め明らかにしておきたい。また本稿で重要なのは、その数的動向を追うことではなく、むしろその中身を明らかにすることであると考え、各分野で日本語教育を目的として行われた対照研究にはどのようなものがあるのかを具体的に示すことにした。数的動向はむしろ学問的研究をも含めた対照研究の全体的動向を見たほうがより明確になると思われる。

2.2 対照研究による日本語教育論文一覧[2)]

表は70年代から98年までの日本語教育に関する日韓両語の対照研究の現況をまとめたものである。これをみれば明らかだが、日韓両語の対照研究は、その半数が音声・音韻の分野で行われている。これは両語が統語・文法などの面で類似していながら音声・音韻の面では大きな隔たりを示し、教育上大きな困難点となっているためであると推測される。その他の分野での研究は80年代に入ってから始まっている。文法面での研究は特に90年代になり盛んになっている。

＜表＞ 日本語教育分野での對照研究論文數

	～75	75-79	80-84	85-89	90-94	95-98	合計
一般			2	3	2	3	10
音聲·音韻	1	5	7	8	10	2	33
文字·表記				2	3	2	7
語彙·用語	1		2	2	1		6
文　法			3		4	4	11
合　計	2	5	14	15	20	11	67

2) データ収集にあたっては、李漢燮(1998)『韓国日本語学関係研究文献一覧』(高麗大学校出版部)、国立国語研究所刊(1997)『日本語と外国語との対照研究Ⅳ　日本語と朝鮮語』などの資料を参考にした。

(1) 一般

日本語教育一般を扱ったものを詳しく見てみると、大きく2種類に大別される。一つは母語別教材や教授法に関するもので、梅田(1980)では母語別教材、金東完(1993)では教授法が扱われている。もう一つは誤用分析に関するもので、柳京子(1987)、田窪行則(1987)、森山新(1996)などがある。

金貞淑(1980), 韓国語教育に関する雑考;日本語教育と関聯して;, 外国人と日本語 5, 筑波大学, 1980.3, 65–77

梅田博之(1980), 朝鮮語を母語とする学習者のための日本語教材作成上の問題点, 日本語教育 40, 日本語教育学会, 35-46

柳京子(1987), 言いあやまり研究の位置づけ;主に対照言語学的な観点から;, 人文科教育研究 14, 人文科教育研究会, 1987.9, 57-64

田窪行則(1987), 誤用分析1～7, 日本語学6-4～10, 明治書院, 104-107

梅田博之(1988), 韓国語와 日本語;言語教育上의 問題点에 대하여;, 일본에서의 한국어교육, 이중언어학회지 4号, 이중언어학회, 1988.9, 144–158

塚本秀樹(1990), 日朝対照研究と日本語教育, 日本語教育 72, 日本語教育学会, 68-79

金東完(1993), 韓国人의 日本語認識과 日本語教授法에 관한 研究;특히 한·일양국어의 비교대조를 중심으로;, 人文論叢 3, 蔚山大学校, 1993.1, 25-49

金淑子(1996), 한・일어의 바람직한 교재를 위하여, 日本学報 37, 韓国日本学会, 1996.11, 13-26

渡邊了好(1996), 韓・日 相互 언어교육에 대하여, 金匡来教授追慕論文集, 金匡来教授追慕論文集刊行委員会, 1996.8, 327-342

森山新(1996), 韓国人日本語学習者の誤用について;作文による事例研究を中心として;, 高麗大学校教育大学院<教碩>

(2) 音聲・音韻

両語は文法や統語構造が似ている反面、音韻構造に著しい違いを持っている。したがって音声・音韻に関する論文は数的にも最も多くなっている。なかでも80年代には両国語の音韻体系の対照を全般的に扱ったものが多く、金勝漢(1982)、金皙淳(1983)、柳京子(1983)、洪思満・金貞淑(1988)김진성(1994)などがある。徐漢秀(1978)、梁元碩(1978)、梅田博之・村崎恭子(1980)、徐漢秀(1981)、閉鎖音(破裂音) を扱ったもの、閔光準(1987, 1989)、平田悦朗(1989)、谷口聡人(1990)、金仁和(1992)、洪珉杓(1992)など、モーラ(拍) など韻律を扱ったものが多い。その他には、大西晴彦(1991)、助川泰彦・佐藤滋(1995)などのアクセントの対照研究、蔡京希(1988, 1989)の漢字音の対照研究、金仁和(1992)、白同善(1994)など韓国語の干渉を扱ったものなどがある。

山田幸宏(1963), 朝鮮人の日本語音認知に於ける難易度の測定について, 日本語研究3, 外國人のための日本語教育學會

朴聖雨・洪思滿(1978), 韓國人の日本語學習における難易度の分析 ;とくに兩國語間の音韻組織の對照を中心に;, 外國語と日本語 3, 筑波大學, 1978.3, 49-79

徐漢秀(1978), 韓日 兩言語 破裂音의 對照分析과 音聲敎育, 東亞大大學院論文集 2, 東亞大學校, 1978.11, 26-57

梁元碩(1978), 日本語 音聲敎育에 있어서 ガ行子音 考察, 慶尙大論文集 17(人文·社會科學編), 慶尙大學校, 1978.4, 77-87

辛容泰(1979), 韓·日語의 音聲·音韻의 比較 硏究;日本語 音聲敎育을 中心으로;, 釜山女大論文集 7, 釜山女子大學, 1979.2, 1-27

李昌雨(1979), 韓·日 兩國語의 닿소리 體系의 差異點과 音聲敎育에 있어서의 問題点, 日語日文學硏究 1, 韓國日語日文學會, 1979.12, 255-284

梅田博之・村崎恭子(1980), 日本語の發音 (韓國語を母語とする學習者のための日本語發音敎材試案) , 特定硏究「ＡＡ諸言語と日本語の學習」資料, 東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化硏究所徐漢秀(1981), 韓·日閉鎖音の対照分析;音声教育のために;, 日語日文學硏究 2, 韓國日語學會, 1981.1, 5-48

徐漢秀(1981), 韓・日閉鎖音の對照分析;音聲敎育のために;, 日語日文學硏究2, 韓國日語學會

金勝漢(1982), 韓日兩國語の音韻組織の違いと音聲敎育上の問題についての一考察, 韓國外國語大學院＜碩＞

金皙淳(1983), 韓日両国語の音韻体系の相違点から来る日本語音声教育の問題点, 仁荷工業專門大論文集 8, 仁荷工業專門大學, 1983.9, 261-271

柳京子(1983), 日本語と韓国語の音韻体系の対照言語学的硏究;韓国人に対する日本語音韻指導の基礎論として;, 筑波大大学院, 教育硏究科＜碩＞

羅聖榮(1984), 日·韓兩語의 音聲的 一考察;日本語 音聲敎育을 中心으로;, 日本學誌 第4集, 啓明大日本文化硏究所, 1984.2, 105-134

李明姬(1984), 韓·日両国語の音韻対照;音声教育を中心にして;, 영주경상전문대논문집 5, 영주경상전문대학, 1984.12, 83-98

柳京子(1986), 韓國人にみられる日本語の言いあやまり;日本語の超分節要素(suprasegmentals)について;, 人文科敎育硏究13, 人文科敎育學會, 63-74

李明姬(1986), 韓國における日本語初級課程學生の聽音能力と發音能力の實態調査, 國語學硏究26, 東北大學文學部國語學硏究室, 53-63

閔光準(1987), 韓國人の日本語の促音の知覺について, 日本語敎育62, 日本語敎育學會, 179-193

蔡京希(1988), 韓·日両国漢字音の対比硏究;日本語教育のために;, 日語日文學硏究 13, 韓國日語日文學會, 1988.8, 279-292

洪思滿・金貞淑(1988), 韓国人の日本語学習における発音難易度の分析;とくに両国語間の音韻組織の対照を中心に;, 外国人と日本語 3, 1988, 筑波大学, 49-62

蔡京希(1989), 韓·日両国漢字音の対比硏究;日本語教育のために;, 語文硏究 第66·67号, 九州大学, 1989.6, 129-138朴熙泰(1993), 韓日兩語의 音韻 및 音聲學的 對照 考察;音聲敎育面을 中心으로;, 韓國外大論文集 26, 韓國外國語大學校, 1993.6, 169-189

平田悦朗(1989)，外国語としての日本語聴解上の問題点;韓国人留学生の音節（拍）の聞き取りを中心として;，お茶の水大学人文科学紀要42，お茶の水女子大学，23-37
閔光準(1989)，韓國語話者の日本語音聲における韻律的特徴とその日本語話者による評價，日本語教育68，日本語教育學會，175-190
李炯宰(1990)，韓国人の日本語学習者の音声教育に関する研究;発音および聞き取り上の問題点を中心に;，日本語と日本文学12，筑波大学国語国文学会，21-38
谷口聡人(1990)，韓国語を母語とする学習者の韻律的傾向について，日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合研究，国立国語研究所，62-64
大西晴彦(1991)，韓国人の日本語のアクセントについて，国際学友会日本語学校紀要15，国際学友会日本語学校，52-60
金仁和(1992)，韓国人学習者の日本語の韻律における母語の干渉（2），国立国語研究所，65-79
洪珉杓(1992)，韓国人学習者の日本語の丁寧表現にみられる韻律的特徴，日本語と日本文学 17，筑波大学国語国文学会，32-42
金仁炫(1993)，韓日兩語の音声·音韻の比較研究;日本語の音声教育の問題点と指導方法を中心に;，外国文化研究 16，朝鮮大学外国文化研究所，1993.1，175-188
朴熙泰(1993)，韓日両語의 音韻 및 音声学的 対照 考察;音声教育面을 中心으로;，韓国外大論文集26，韓国語外国語大学
김진성(1994)，한일 양국어 음운체계의 차이를 이용한 음성교육에 대해서，全州大教育論叢 9，全州大學校，1994.12，39-64
大西晴彦(1994)，韓国人の日本語の発音について，国際学友会日本語学校紀要16·17，国際学友会日本語学校，21-33
白同善(1994)，日本語および韓国語の音声習得における言語間干渉，ことばの科学 6，名古屋大学言語文化部，1994.1，79-95
助川泰彦・佐藤滋(1995)，韓国人学習者の日本語アクセント知覚における音節構造の影響，東北大学留学センター紀要2，東北大学留学センター，27-32
酒井眞弓(1996)，日韓両国語の音声学的対照研究と日本語学習者の発音上の問題点，德成女大論文集 25，德成女子大學校，1996.3，161-183

(3) 文字・表記

文字・表記の分野では、外来語(表記) と漢字(読み・字体) に大別される。外来語の表記では、村上治美(1989)、趙南星(1992)、鄭恵卿(1995)などがあり、漢字の読みでは、金潤喆(1986)、近藤清兄(1991)、漢字の字体に関しては崔鎔赫(1995)などがある。

金潤喆(1986)，韓國人日本語學習者に對する漢字の讀みの指導，廣島大學大學院教育學研究科博士課程論文集12，廣島大學大學院教育學研究科，124-130
村上治美(1989)，韓國人學習者の日本語の外來語表記，東海大學紀要留學生教育センター9，東

海大學留學生教育センター，1-12
近藤清兄(1991)，韓國人留學生の日本語使用における漢字音・漢字語の誤りについて，東北大學文學部日本語學科論集1，東北大學文學部日本語學科，80-91
趙南星(1992)，韓國人日本語學習者による外來語表記の誤り;日本語話者による評價を中心として;，日本語教育78，日本語教育學會，178-190
泉文明(1992)，日本語教育から見た二重表記;日韓兩言語の二重表記の對比;，日本語教育78，日本語教育學會，191-201
鄭惠卿(1995)，韓国人の日本語学習における外来語表記の問題;日・韓兩言語の音韻対照による分析;，日本語教育 87，日本語教育學會，1995.11，54-65
崔鎔赫(1995)，韓・日・中의 文字政策과 漢字의 字體研究，日本學報 2，慶尙大日本文化研究所，1995.12，177-204

(4) 語彙・用語

語彙に関しては、漢字語彙(大村益夫:1965)、複合名詞(Song Zino:1981)、漢字語用言(権海珠:1987)、擬音・擬声語(生越まり子:1989)、指示語(宋晩翼:1991)に関する対照研究などがある。

大村益夫(1965)，中国人・韓国人に対する漢字語彙教育について，講座日本語教育1，早稲田大学語学教育研究所，61-77
Song Zino(1981), Complex Noun Phrases in Japanese and Korean:A Lingyistic Analysis for Languge Education, Ed.D.Dissertation, University of SanFrancisco, 1981
門脇誠一(1982)，日本語と朝鮮語の語彙，日本語教育48，日本語教育学会，43-52
権海珠(1987)，日本語의 「漢字語用言」과 韓国語의 「用言 ～하다」의 対応関係 考察;現行高等学校 日本語教科書의 語彙를 中心으로;，日語教育 3，大韓日語教育研究会，1987.2，87-103
生越まり子(1989)，日本語の擬音・擬態語教授上の問題点;朝鮮語（韓国語）を母語とする人々に対して;，日本語教育68，日本教育学会，71-82
宋晩翼(1991)，日本語教育のための日韓指示語の対照研究 ;コ・ソ・アと이・그・저との用法について;，日本語教育 75号，日本語教育学会，1991.11，136-152

(5) 文法

文法の分野では安炳俊(1983)、李東烈(1984)、崔相植(1991)、金仁炫(1996)、森山新(1997)など助詞に関するものが最も多く、その他アスペクトに関するもの(李徳泳:1990)、ヴォイスに関するもの(鄭寅玉:1994)、接続に関するもの(森山新:1997)などがある。

安炳俊(1983)，韓・日語助詞「を」와 「를(을)」比較 研究;韓国 学生의 誤用例를 中心으로;,円光大教育大学院<教碩>
生越直樹(1984)，日本語複合動詞後項と朝鮮語副詞・副詞的な語句との関係;日本語副詞指導の

問題点;, 日本語教育52, 日本教育学会, 55-64
李東烈(1984), 韓・日 助詞에와 に의 比較研究;韓国에서의 日本語 教授法 改善을 위해서;,円光大教育大学院, 外国語教育専攻<教碩>
李徳泳(1990), 特集·日本語教育のための対照研究;アスペクトにおける日韓両言語の対照研究;, 日本語教育 72, 日本語教育学会, 1990.11, 15p
崔相植(1991), 韓·日両国語助詞「は」·「が」と「는」·「가」の比較研究;日本語学習者の作文の誤用例を中心として;, 日語教育 7, 韓国日本語教育学会, 1991.11, 33-55
鄭寅玉(1994), 日本語教育における日・韓国語対照研究;受身文を中心に;, 日本語教育研究 28, 言語文化研究所, 1994.12, 59-78
白同善(1995), 成分添加による尊敬表現の日韓比較, 人文科学研究 24, 名古屋大学大学院文学研究科, 1995.3, 55-74
金仁炫(1996), 日韓両語における助詞の対照研究;「은/는」「이/가」と「は」「が」の誤用と省略を中心に;, 外国文化研究 19, 朝鮮大外国文化研究所, 1996.4, 167-183
森山新(1997), 韓国人日本語学習者の誤用について;接続を中心として;, 高大日語教育研究 1, 高大日語教育研究会, 1997.8, 25-66
森山新(1997), 韓国人日本語学習者の誤用について;接続助詞「て」と「から/ので」を中心として;, 月刊日本語3, 9-10, アルク・時事日本語社, 1997.9-10.

3. まとめ

外国語教育における対照研究の位置づけを概観するとともに、韓国における日本語教育の中で行われてきた日韓両国の対照研究を調査した。外国語教育において対照研究は当初、困難点や誤用を予測するものとして期待されたが、今日ではそれら困難点や誤用が生じる原因を説明するものとしての役割を担っている。韓国における日本語教育では、上述したように日韓両語が統語・文法などの面で類似する一方で、音声・音韻面では大きく異なっていることから、対照研究においても音声・音韻分野の研究が最も多数を占めていた。しかし最近になって文法などの対照研究が増えてきたのは、困難点や誤用というものが母語と目標言語との隔たりの大きさに比例するものではなく、むしろ母語と目標言語が類似している場合に生じやすいということが明らかになってきたことと決して無関係ではないと思われる。そのようなことを考えると韓国における日本語教育においては、音声・音韻面での対照研究はこれからも引き続き行われていくものの、その比重は徐々に低下し、むしろこれまで両語の類似性を理由にあまり研究が行われてこなかった文法や統語などの面が活発化していくことが予想される。

また誤用というものの見つめ方が時代とともに変化し、中間言語という概念が生まれたり、第二言語習得研究が日本語教育に対しても行われるようになってきたことを考えると、今後はこれまでのような誤用分析とともに、中間言語や第二言語としての日本語習得との関係の中で対照研究が用いられていくことが考えられる。

* 참 고 문 헌 *

石綿敏雄・高田誠(1990)『対照言語学』(おうふう) .

梅田博之(1982)「韓国語と日本語：対照研究の問題点」『日本語教育』48号.

荻野綱男(1989)「対照社会言語学と日本語教育：日韓の敬語用法を例にして」『日本語教育』69号.

奥津敬一郎(1990)「日本語教育のための対照研究」『日本語教育』72号.

菅野裕臣(1990)「日本語と朝鮮語」『講座日本語と日本語教育12』(明治書院) .

国立国語研究所編(1997)『日本語と外国語との対照研究Ⅳ　日本語と朝鮮語』(くろしお出版) .

塚本秀樹(1990)「日朝対照研究と日本語教育」『日本語教育』72号.

林四郎編(1986)『応用言語学講座　第2巻　外国語と日本語』(明治書院) .

ビビアン・クック著、米山朝二訳(1993)『第2言語の学習と教授』(研究社出版) .

森山新(1999)「第二言語習得研究の歴史」『高大日語教育研究』(高大日語教育研究会).

山岡俊比古(1997)『第2言語習得研究＜新装改訂版＞』(桐原ユニ) .

リディア・ワイド著、千葉修司他共訳(1992)『普遍文法と第二言語獲得：原理とパラメータのアプローチ』(リーベル出版) .

李漢燮(1998)『韓国日本語学関係研究文献一覧』(高麗大学校出版部) .